第八巻

武田祐吉著作集

角川書店

武田祐吉著作集

第八巻 文歌 学物 史語 篇

昭和四十八年十一月三十日 初版発行

著者 武田祐吉

発行者 角川源義

印刷所 奥村印刷株式会社

製本所 株式会社 宮田製本所

発行所 株式会社 角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見二の一三
〒一〇二 ㊥東京一九五二〇八
電話 東京（二六五）七一一一

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えいたします

3392-561208-0946(0)

目

次

上代日本文学史

序　一

自序　三

序説　時代と土地　一五

一、時代の概観　一五

二、大和国原　一七

第一編　近江朝廷以前の時代　二三

第一章　日本文学の出発　二三

一、日本民族の成立　二三

二、蘆原の瑞穂の国　二六

三、古代社会組織　二六

四、文字以前の文学　二三

五、日向系統の文学　二三

六、古史神話の根本形式　二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七、出雲系統の文学　四〇
八、古代祝詞の本質　四五
九、原始文学の特色　五三
第二章　古代の歌謡　五六
一、古代歌謡概説—応神天皇以前　五六
二、古代歌謡概説—仁徳天皇以後　六三
三、古代歌謡の表現様式　六六
四、古代歌謡の形態　七二
第三章　大陸文化の渡来とその影響　七六
一、漢字の渡来とその流通　七六
二、文字使用法と文章　八〇
三、大陸文化の刺戟　八五
第二編　飛鳥藤原奈良時代　九〇
第一章　時代の概観　九〇
一、氏族制度の破壊者　九〇
二、仏教と老子教　九三
第二章　典籍の撰修　九五
一、『古事記』の成立　九五
二、『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』、風土記　九九

第三章　『万葉集』総説　一〇四
一、『万葉集』の概要とその作者　一〇四
二、『万葉集』における「われ」の表出　一一〇
三、『万葉集』における「われ」の素質　一一五
四、『万葉集』における「われ」の環境　一一八
五、国文学における季の起原　一二三
六、食物を愛す　一二〇
七、自然を愛す　一三二
八、外来の思想　一三六
九、社会に対して　一三八
第四章　飛鳥藤原の宮時代の歌　一四〇
一、柿本人麻呂と高市黒人と　一四〇
第五章　奈良朝初期の歌謡　一四六
一、奈良朝初期の歌壇　一四六
二、山部赤人と笠金村と　一五〇
三、高橋虫麻呂　一五二
四、山上憶良と大伴旅人と　一五六
第六章　奈良朝中期の歌謡　一六三
一、天平時代の歌壇の展望　一六三
二、湯原の王　一七〇

三、大伴家持　一七三
第七章　小説と漢文学と　一八六
一、上代の小説　一八六
二、万葉時代の漢詩文　一九七
第八章　奈良朝末期の文学　一九九
一、上代文学における善意の破綻　二〇四
二、奈良朝末の歌壇　二〇九
三、平安朝へ　二一五

外編　上代文学書解題　二一五
一、小　引　二一五
二、古事記　二一七
三、日本書紀　二二一
四、風土記　二二五
五、上宮聖徳法王帝説　二二二
六、懐風藻　二二三
七、万葉集　二二五
八、仏足跡歌碑　二二八
九、歌経標式　二四〇
十、家　伝　二四六

十一、唐大和上東征伝　二四六
十二、正倉院文書　二四六
十三、続日本紀　二四八
十四、高橋氏文　二五〇
十五、皇太神宮儀式帳、止由気宮儀式帳　二五一
十六、古語拾遺　二五一
十七、日本国現報善悪霊異記　二五三
十八、尾張国熱田太神宮縁起　二五四
十九、延喜式　二五四
二十、琴歌譜　二六一
二十一、東大寺要録　二六二

国文学研究　歌道篇

序　二六五
第一　短歌形式の結成および伝来　二六七
一　短歌形式の結成　二六七
二　短歌形式の歌曲　二八六
三　短歌の伝来　二九一

第二　歌謡の記録　三三八
一　記紀歌謡の記録　三三八
二　『万葉集』における音声の記録とその再現　三三五
第三　古歌の性能および形態　三四九
一　古歌における闘争性　三四九
二　連作の歌　三五三
三　雑体和歌　三五七
四　『歌経標式』とその歌　三七三
第四　歌集および歌人　四〇一
一　『万葉集』以下二、三の選集の編纂事情　四〇一
二　紀氏と『新撰和歌』　四〇七
三　『拾遺和歌集』の成立　四一三
四　歌集の化成　四二四
五　『新古今和歌集』の成立およびその伝来　四三一
六　隠岐本『新古今和歌集』の一伝来　四七五
七　如願法師　四八四
八　新葉の風格　四八六

九　長慶天皇を仰ぎ奉りて　四九〇
志都歌の歌い返しの考　五〇八
『琴歌譜』における歌謡の伝来　五一五
あとがき　五三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上代日本文学史

序

武田祐吉君は、予が同じ代に生まれあいたるを常に喜びとする若干の篤学者中の一人なり。君は国学院大学に学び、東京帝国大学の『万葉集』校訂の事業にたずさわられしこと九年余。爾来母校の教授となりて今日に及べり。その間学界の注意を促すに足る価ある著書論文を発表せられしこと少なからず。なかんずく、『万葉集書志』のごとき、長慶天皇受禅説のごとき、世のあまねく知るところなりとす。

君はまた、はやく、国文学を中心としてわが国の上代の文化を研究することに志され、すでに幾多の労作を世に公けにせられしが、ここにその多年の蘊蓄を傾けて本書を完成せられしは、君と相識り、君と交わること深き予の衷心の喜びなりとす。およそ君の学風たる、精緻なる考証的研究の基礎上に立ちて、しかも卓抜なる観察を試み、先人未発の境地を開拓せられたるもの少なからず。往々世に見るがごとき考証家の学問の煩瑣に流れ、また評論家の見解の空疎に陥る弊なきを、最も推重すべしとなす。

しかりといえども、君が学説中のある部分には、その見解を異にする学者はたなきにしもあらざらん。かくのごときは、およそにわかに決定しがたきこの種の問題を対象として試みられたる言説においては、むしろ自然の結果ともいいつべからん。されば、それらの学者といえども、君が学風に対しては、その現在学界の異彩たること、ないしその業績の学界に貢献することの多大なるを承認すべきこと、予の毫も疑わざるところなり。

佐佐木信綱識

自序

前著『上代国文学の研究』の稿を終えて、これに自序を記し添えたのは大正九年の八月下旬であった。それからちょうど十年の歳月が流れている。

前著は幸いにして世に迎えられ、しばしば版を重ぬるに至ったが、著者として不満の点も多く、誤謬も見いだされるにつけ、改修増補の機会を得たいとは常に思っていたことであった。いまその後に作成した諸論文をとって、かれとこれと綴り合わせてわずかにこの一書を成すを得た。実質よりいわば、前著の改修増補であり、旧草と新稿と相隣比している状態にある。

かくのごとく前著に改修増補を加えたものではあるが、構成はまったく変更し、内容増加の部分は、かなりの分量に上っている。前著はこれを四編に分かち、第一編、上代の文化と説話文学、第二編、歌謡と漢文学、以上の二編において、上代の日本文学を概説し、第三編、資料の解説、第四編、『万葉集』の撰定に関する研究、以上の二編においては、上代文学の収載典籍について解説した。しかしてこれに改修増補を加うるに当たり、文学史としての体系を与うるほうが便宜であることを想うて、見らるるがごとき形のものとなした。すなわち第一編を近江朝廷以前の時代、第二編を飛鳥藤原奈良時代とし、以上をもって古代から奈良朝までの国文学の史的叙述を試みた。この時代の区劃は、もっと小分したほうがよいでもあろう。第二編にしても、飛鳥藤原宮時代と奈良朝時代とに分けるべきであろうが、それでは『古事記』『日本書紀』等の説話文学の取り扱い方に困るし、『万葉集』にしても、作者未詳であって、時代の判明せぬ歌は、始末に窮する。この書における分けなくてもよいくらいな時代の分け方は、かえって実際に適した方法であろうと

思う。

外編の上代文学書解題は、前著の第三編に相当する。文学史的叙述からは当然除外せらるべき典籍の解題は、なお便宜を感ずる読者のあることを予想してこれを収めた。前著の第四編、『万葉集』の撰定に関する研究は、前著中においては、著者の最も信をおいた編であったが、今回は上代日本文学史としての体裁を整えるために、これを割愛することとした。

前著に不満足を感じた著者は、ついに改修を加えてこの書を成すに至ったが、この書に対しても、また不満足の念は止むべくもない。やがてふたたび改修を加うる時機が到来するならば、そは著者にとってきわめて幸福であるといわねばならない。

前著の著述出版に際しては、佐佐木信綱博士から多大の好意を受けた。『歌経標式』に関する記事を載せえたのもまったくその盛意により、また無名の一書生であった著者の著述に対して出版書肆に紹介せられ、また序文をも与えられた。厚く感謝の意を表する。

本書の装画は笈掛操君、索引は木内一夫君の労作に係る。記して謝意を表する。

昭和五年八月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com